

ICTを活用した先導的な教育の実証研究に関する協議会（第1回）議事要旨

1. 日時：平成23年11月14日（月）10：00～11：30
2. 場所：中央合同庁舎2号館 8階 第一特別会議室
3. 出席者

(1)委員（敬称略）

○学びのイノベーション推進協議会

安西祐一郎（座長）、五十嵐俊子、岩崎有朋、大内進、小泉力一（※）、高木まさき、東原義訓、三宅なほみ、村井純（大川代理）、村上輝康（※）、山本清和

○フューチャースクール推進研究会

清水康敬（座長）、石原一彦、小泉力一（※）、曾根節子、長谷川忍、前迫孝憲、村上輝康（※）、矢野米雄

※両会の重複委員

(2) 文部科学省

森文部科学副大臣、城井文部科学大臣政務官、板東生涯学習政策局長、山中初等中等教育局長、伊藤官房審議官、新井生涯学習政策局参事官、平林教育課程課長

(3) 総務省

松崎総務副大臣、森田総務大臣政務官、小笠原総務審議官、佐藤政策統括官、阪本官房審議官、黒瀬情報流通振興課長、安間情報通信利用促進課長

(4)事務局

総務省情報流通行政局情報通信利用促進課

文部科学省生涯学習政策局参事官（学習情報政策担当）付

4. 配布資料

資料1 学びのイノベーション事業及びフューチャースクール推進事業の取組について

資料2 ICTを活用した先導的な教育の実証研究に関する協議会名簿

資料3 フューチャースクール推進事業 平成23年度第1学期の取組状況について

参考資料1 学びのイノベーション事業、フューチャースクール推進事業の実施体制

参考資料2 「学びのイノベーション推進協議会」設置要綱

参考資料3 「フューチャースクール推進研究会」開催要綱

参考資料4 平成23年度実証校（小学校）の取組について

参考資料5 報道資料「総務省「フューチャースクール推進事業」及び文部科学省「学びのイノベーション事業」に係る委託先候補の決定

参考資料6 石原委員提出資料

5. 議事概要

(1) 開会

(2) 総務副大臣・文部科学副大臣挨拶

○森文部科学副大臣より以下のとおり開会の挨拶があった。

・我が国は、今、東日本大震災という戦後最大の困難に直面している。この困難を乗り越え、将来の日本を支える人材を育成するためには、何よりも教育の充実が大切である。

・10月31日に、実証校の1つである葛飾区立本田小学校を訪問し、4年生の算数の授業等を拝見してきた。子どもたちは、一人一台の情報端末を活用し、試

行錯誤しながら、点の数を求める方法や式を工夫して考え、電子黒板を使って、自分の考えを発表し合い、真剣に話し合っていた。

- ・また、発達障害の児童が、授業に集中して取り組んでいる姿は強く印象に残った。
- ・まさに、子どもたち一人一人の理解や興味・関心に応じたきめ細やかな指導や子どもたち同士が学び合う「協働学習」のすばらしさを実感した。こうした新しい学びを、他の学校へ広めていきたいと、意を強くした。
- ・こうした新しい学びへ対応するために、情報通信技術を積極的に活用していくことが重要であることは言うまでもない。文部科学省では、本年4月に、21世紀にふさわしい学びと学校の創造を目指し、「教育の情報化ビジョン」を策定し、学校教育の情報化を推進している。
- ・さらに、21世紀にふさわしい学校教育の実現に向けて、「学びのイノベーション事業」と「フューチャースクール推進事業」の役割は非常に大きいと考えている。情報通信技術面を担当する総務省と教育面を担当する文部科学省が一体となって、着実に実証研究を推進することが大切である。
- ・本日、両省協議会の委員の皆さまから、大所高所からのご指導を賜るとともに、活発なご議論をお願いしたい。

○松崎総務副大臣より以下のとおり開会の挨拶があった。

- ・本協議会は総務省と文部科学省の事業の連携・調整を図るために、総務省「フューチャースクール推進研究会」と文部科学省「学びのイノベーション推進協議会」を合同で開催する会議であり、本日が第1回目。
- ・総務文科両省の事業については、両省が同一の学校20校を対象にして、主に情報通信技術面を担当する総務省と、主にソフト面を担当する文部科学省が一体となって実証研究を行うもの。この役割分担については当時の両省副大臣が政治主導で決めたと聞いており、省庁間の縦割りを排して政府一丸となって政策に取り組むモデル事例として、大変意義深い事業である。
- ・このような中、フューチャースクール推進事業の状況を紹介すると、昨年10月から実証授業が始まった小学校については、今年度、初めてとなる1学期や夏休み期間を迎えて実証研究に取り組んできた。また、今年度からの中学校・特別支援学校については、10月中旬に事業実施に向けた手続きを終えたところ。
- ・この実証研究を通じ、総務省では、紙の良さとICTの良さを効果的に活用する観点から、教育現場で求められるタブレットPCの機能やネットワークの構成など情報通信技術面から実施方策の検証に取り組んでいる。
- ・閣議決定した新成長戦略で掲げている2020年までに「21世紀にふさわしい学校教育」を実現するという目標を達成するために、情報通信技術の活用により「子どもたち一人一人の能力や特性に応じた学び」や「子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び」などを実現することが期待される。
- ・これらにより、私の理念である「人を思いやる心をもてる教育、創造性をはぐくめる教育、親と子どものコミュニケーションが十分取れる環境の構築」の実現が図れるのではないかと考えている。
- ・本日の会議では両省協議会の委員が一堂に会していることを踏まえ、是非互いの事業の発展・推進に向けた大所高所からのご助言・ご指導を賜りたい。

(3)議事

- 資料の確認及び学びのイノベーション事業及びフューチャースクール推進事業の取組について
(事務局より、資料の確認及び資料に沿って学びのイノベーション事業及びフューチャースクール推進事業の取組について説明)

- これまでの実証校（小学校）における取組（西日本地域）について（株）富士通総研よりプレゼンテーション
(河合執行役員)
 - ・フューチャースクール事業の開始から1年以上が過ぎ、各学校でも日常的に自然な形でICTの機器が使われているという状況になっている。
 - ・また、9月からは学習者用のデジタル教科書の活用が実際に始まった。
 - ・例えば、算数では図形を実際に児童が教科書の上でいじりながら考えたり、英語では画面に映る先生の口元を見ながら発音の練習をしたり、色々な使い方がされており、これから色々な活用の仕方があると感じている。
 - ・今後、現場から出てくる色々な声をフィードバックさせていただきたい。
(その後、担当者より授業風景やICT環境の映像を放映しながら、説明)

- これまでの実証校（小学校）における取組（東日本地域）について、エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ（株）よりプレゼンテーション
(海野副社長)
 - ・ICTを教育に使うということは、将来に向けて大変重要なことだと思っている。
 - ・これまで、委員の皆様からは適切なアドバイスあるいは厳しいコメント等をいただいております、今後とも御指導いただくようよろしくお願いいたします。
(その後、担当者より授業風景やシステム構成の映像を放映しながら、説明)

- 小学校デジタル教科書・教材の開発状況について、光村図書出版（株）よりプレゼンテーション
(担当者より、実際にデジタル教材の操作を行い、投影しながら、説明)

- フューチャースクール推進事業平成23年度1学期の取組状況について
(清水座長)
 - ・昨年度からフューチャースクール推進のための研究会を開いている。昨年度の成果として、特にインフラ整備に関わる点を総務省として記述したガイドラインを作成した。色々なところから、非常に参考になると言われているところ。
 - ・昨年度については、すでに研究会で報告済みであり、総務省のホームページに公開しているが、資料3は今年の4月から8月までの1学期中の協働教育に関わる取組の数について、データをもらって、分析、集計したものである。なお、本事業は特に協働教育に注目しているので、協働教育の場面を集計した。
 - ・当初、小学校1年、2年ではタブレットPC一人一台はなかなか難しいのではないかという意見があったが、2年目になり、1、2年生でも数が多くなっていることが特徴的である。
 - ・教科としては算数での取組が多くなっており、1学期だけで昨年を超える活動が行われた。また、学級全体での議論の場面が増えた。
 - ・先日視察した西与賀小では、すべての先生が3分の2の授業でICT環境を使

っていると聞いており、非常に成果が上がっていると思った。また、小学生がタブレット PC をかなりのスピードで使いこなしている姿を見て、小学生に関してはデバイドというのではないなど思った。

- ・副大臣から大震災の話があったが、私も非常に関心をもっており、宮城県に2日間視察に行き、指導要録やサーバーなどにどのような状況が起こったのかという点を聞いてきた。今後の取組について考える際の参考にしたい。

○意見交換

(森田総務大臣政務官)

- ・エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズに伺いたい。3G の乗り入れを MVNO にしているのには、目的外利用の防止、セキュリティ対策などの観点から理由があると思うが、運用上の問題や行ってみたいの感想等を聞かせて欲しい。

(エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ (株))

- ・利用している仕組みは通常の MVNO の構成であり、特別な周波数を使っているといったことはない。各学校はクラウドネットワークで構成し、その延長線上で、携帯のネットワークも専用線的に使えるように構成している。また、家庭のネットワーク環境に依存しない環境を提供している。

(森田総務大臣政務官)

- ・通常、3G を使うと十分接続できないことがあるが、MVNO にすればこれが改善されるといったようなことはあるか。

(エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ (株))

- ・品質はクラウド側で管理しているため、特につなぐりにくいという話は聞いていない。
- ・どの事業者でも使える仕組みで行っている。MVNO だから接続状況が変わるということはない。

(城井文部科学大臣政務官)

- ・子供たちの目の輝きが圧倒的に違うというところがこの取り組みの一番いいところだと思う。我々としても是非しっかり頑張っていきたい。
- ・3つの質問と1つの意見を申したい。
- ・1つ目は、サーバーのセキュリティについてである。セキュリティが100%確証できない現在の技術状況で、個人情報をごくまで載せられるかの線引きが難しいと思うが、それについてどのようにしているか。
- ・2つ目は、非常時の電源確保の件について、どのように確保していく考えか。
- ・3つ目は、子供たちが熱中し過ぎてまばたきを忘れると思うので、目の疲れが心配になるが、健康管理についてどのように考えるか。
- ・意見としては、ICTの担当教員の役割についてである。先日、教員研修センターでICTに関する教員研修の参加者と意見交換をしたが、その際、ICTの担当教員は、授業支援を行いたいのだが、パソコンのメンテナンス等の相談が多く、その結果、本来業務に影響がでていくという話があった。支援の役割の議論は今後重要になってくると思うので、皆様にもご検討いただきたい。

((株) 富士通総研)

- ・サーバーは、現行の校務システムなどに影響を与えないよう、物理的に分離し

たフューチャースクール専用のネットワーク環境を作り、セキュリティを確保している。タブレット PC については、盗難に備え、基本的に電源を入れなおすとデータが消えるソフトウェアを入れており、タブレット PC の中には情報を保存しない形にしている。

- ・非常時の電源確保は、今年度の実証研究については、ネットワーク環境と電源が確保されている状態を想定しているが、最低限使う機器やそれらのバッテリーなどによる稼働の可能性について検証していく予定である。
- ・目の疲れについては、照度計を用いて周りの明るさの環境を計り、どの程度が最適かを検討するためデータを収集している。目以外の健康面については、ICT 支援員のアイデアで、肩こりをほぐすような体操を取り入れている学校もある。

(清水座長)

- ・フューチャースクール 10 校では、ICT 支援員を各校 1 名入れている。昨年度は特に、タブレット PC や電子黒板の使い方等について支援員が対応する、あるいはバッテリー交換を手伝うといったことが多少あったようだ。
- ・しかし、その経験を踏まえて、今年度は、そうした機器のサポートよりも、より教育的な支援にシフトしてきている印象がある。支援員が各校 1 名必ずいることに、校長先生や教員は非常に感謝している。

(安西座長)

- ・先ほどの説明で、「違和感なくできる」、「利活用はすごく行われている」とあったが、本当に子供が自然に、普通に考え、普通に手や体を動かして、学ぶという状況に照らして、どの程度まで達しているかについて、どのように評価すべきとお考えかうかがいたい。
- ・健康の問題にも関係するが、例えば工場の管理などでは、照明の環境等の様々な基準ができていますが、子どもに関してこうしたものはほとんどない。こうしたものは是非、国に考えていただきたい。

((株) 富士通総研)

- ・どのように使われているかの例示から、自然に使われている様子を説明する。実証校では、例えば授業以外の活動の場で、ディスカッションしてなにかをまとめないといけない場合に、タブレット PC をもってきてディスカッションをすることが行われている事例もある。
- ・また、音楽のクラブ活動で、タブレット PC を横におき、譜面を見ながら演奏するというのを、先生の指導なしに、自然に行われている事例もある。利用している時間という観点では非常に定着しつつあると感じている。

(板東文部科学省生涯学習政策局長)

- ・ご指摘のあった教員のサポートのあり方や、子どもたちの健康に与える影響の把握、さらにはこうした取組の効果、成果などについて、この実証研究を通じて、詳細に分析し、現場にもフィードバックをし、また一定のガイドラインのようなものをまとめていくことを考えていきたい。

(光村図書出版 (株))

- ・デジタル教科書については、書き込みの量と質をしっかりと見極めていきたい。

(三宅委員)

- ・児童一人一人の細かい学習履歴を蓄積できる基盤になっていると思うが、どのように蓄積、処理し、将来、分析する予定か。これら学習履歴の活用は、この事業の将来展開に大きく影響すると考えている。
- ・事例は大変印象的であったが、協働学習のゴールをどこに置いているか伺いたい。21世紀型スキルとよばれるスキルの獲得を目指す協働教育という観点からは、一人一人の学ぶ内容や学び方の多様性が、新しい議論を生み出し、それらが統合されてイノベーションにつながる、といった学びのゴールが目指されるべきと考えるが、御紹介からはそういうものではない印象を受けた。このような方向にもっていくために、できることがあれば協力したい。

(エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ(株))

- ・どのような機能をどれだけの時間、頻度で使ったかの履歴は残しており、初年度の履歴については報告書で分析をしているので、御覧いただきたい。結果の活用についても、今年度、データがとれていると感じているので、改めてご報告差し上げたい。

(森文部副大臣)

- ・協働学習のゴールについて、大変貴重な御提言をいただいた。冒頭に話した訪問校では、1つの問題に対し、様々な考え方を引き出し、子どもに順次発表させることにより、短い授業時間の中で瞬時に色々な考え方を共有できる授業を行っていた。そこからさらに踏み込んだ部分については、今後必要などころではないかと思う。その検証をさらに充実させるためにご指摘を役立てたい。

(安西座長)

- ・一人一人が違った考え方を持って、それをみんなで共有していくといった学びの環境を作っていくことは、これからの方向性だと思う。

(清水座長)

- ・フューチャースクール推進事業では、インフラ整備の評価だけでなく、教育的にどのような協働教育の活動があったかを評価している。
- ・初年度は整備前後で全教員に調査を行い、その結果、例えば最初は負担感が非常に大きかったけれども、年度末には非常に負担感がなくなったといったデータが出ている。
- ・また、子どもに対する調査も年度末に全児童に対して行い、タブレットPCを使うことに関して非常に高い評価を得ている。さらに、特別な支援が必要な児童が、タブレットPCが使える環境になり、動き回ることもなくなったといった効果もでてきている。今年度もこうしたエビデンスを出していくことが非常に重要と考えている。
- ・協働教育のゴールに関しては、一人の子どもが複数の解き方を考え、複数の子どもの考えが電子黒板に一覧され、それをもとに教員が議論をナビゲートするといったことが行われている。あるいは3人一組で画面を共有し、お互いの考えを説明・議論することにより、色々な考え方を学ぶといったことが行われている。こうしたことはノートに書くことでは実現できず、今回の環境だからこそ実現できることと考えている。こうした成果をきっちり出していくというのが今年度からの重要な課題と考えている。

(村井委員 (大川代理))

- ・教科書は、次の学年になっても、中学校になっても、高校になっても、将来にわたって何度でも繰り返し見るようなものになってくると思うが、こうした時間軸に対して、デジタル教科書の設計のコンセンサスはどのような形でとられているのだろうか。
- ・クラウドの設計も、個人と教科書という関係を考えると、学校単位の認証管理ではないものが望まれるかもしれない。中学校になったらアクセスできないというのは不便だと思う。せつかく紙の媒体から解放されるのだから、そうしたこと（個人と教科書の生涯に渡るユビキタスな関係）も考えてはどうかと感じた。

(安西座長)

- ・学校の中だけで学ぶ、あるいは小学校を過ぎたら小学校の情報にアクセスできない、といったことにならないようにしなければいけないと思う。これはセキュリティの問題とあわせて考えていくべき非常に大きなテーマではないかと思う。

(村上委員)

- ・両省合同の議論のすばらしさを感じている。
- ・技術面からは、クラウドやユビキタスといった議論になる。教育面からは、理想の教え方や 21 世紀にふさわしい教育という問題意識が出てくる。お互いにそれが可能かどうかを検証できる場があるというのが、この取組の最もよい点だと思う。現場レベルでもお互いの立場から議論できる場があるとよいと感じた。
- ・教育の効率を上げるという面と、教育の創造性を上げる、あるいはイノベーションをしていくという、少なくともこの 2 つの側面があると思う。教育の効率を上げる、分かりやすく教えるという点については、色々な分かりやすい事例等を御紹介いただいたが、教え方、学び方の革新をしていくこと、あるいは 21 世紀的な教え方や学び方とはどういうものなのかについて、どの程度、つつこんでいけるかがこの取組のポイントになると思う。
- ・御紹介の事例を見た限りの印象では、子どもは常にディスプレイを見ており、先生の存在が希薄になっている感じがした。ICT と生徒の関係を先生が自由自在にコントロールしているという状態が理想的だと思う。
- ・これから評価をするときにも、効率性という側面だけでなく、教育の創造性という側面についても視点を入れていただければと思う。そういう面で、清水座長から御紹介のあった資料は非常に示唆に富むものだと思う。こうした点が深まることで、この取組の価値が非常に大きく広がると思う。

(安西座長)

- ・両省が一緒に相携えて、現場も含めて、子供たちのために尽力していただくというのは本当に素晴らしいことだと思う。私からも、両省にはよろしく願いを申し上げる。

(高木委員)

- ・活動により効率が上がったという報告が多い印象である。それはそれで大事だと思うが、一方で、例えば、活字をデジタルで読みとることと紙から読み取ることの違いといった基本的な検証は大事だと思う。

- ・小説をゲーム機で読んで感想文を書いた生徒は、その後、なにを書いたか聞かれて思い出せなかったという話を聞いたことがある。こうしたことを考えると、デジタル情報を活用する際に注意すべき点を整理する、あるいはその前提となる基本的な検証を蓄積することが重要と考える。例えば、書き込みについても、タブレットPCに書くのと、鉛筆で書くのでは、子どもたちに残るものが違う可能性もある。何をどういう観点で調査するのか、全体として整理し、調査を推進していただきたいと思う。

(安西座長)

- ・今いただいた話のようなデータはあまり蓄積されていないと思う。大事なことだと思うので、是非、検討いただければと思う。

(岩崎委員)

- ・御報告や御意見の中でいろいろな事例を御紹介いただいたが、タブレットPCを使い終わった後に、子どもたちにそうした学び方が残っているかについて、伺いたい。

((株) 富士通総研)

- ・大阪の萱野小学校では、もともと模造紙や付箋紙を用いて、協働学習的な取組に力を入れていたが、準備に非常に時間がかかっていたようだ。ICT環境が整備されることにより準備の必要がなくなり、例えば授業の中で15分だけ使うといったように、活用の幅が非常に広がってきていると聞いている。

(曾根委員)

- ・両省合同の会議を望んでいた。本校では、援助のない中で、校長のリーダーシップにより21世紀型の授業を構築しているが、やはり限界がある。2020年までの整備を期待しているが、行政により温度差があり、国で主導して展開していることを理解していない行政もいる。
- ・全国の小学校の校長会、中学校の校長会、あるいは特別支援学校の校長会などで、こうした取組や、これからの教育における学び方や指導方法の変革の必要性といったことについて、両省から指導していただきたい。また、行政に対しても、教育長会などの場で、周知していただきたい。

(五十嵐委員)

- ・曾根委員の御発言はもっともだと思う。
- ・日野市では、教育のICT化の推進のために、企業と行政と研究者をつなぐ組織を作ったが、全ての自治体でこうしたことが実現されるわけではない。冒頭、国難を乗り越えるための教育の必要性について副大臣より御挨拶があったが、今こそ、これからは背負う子どもたちの学びを変えるんだということをもっともっと大きくうたい、総務省、文部科学省だけでなく、国を挙げて教育改革を推進していかないと、自治体は動かないのではないかと感じている。
- ・本校は、総務省の絆プロジェクトで、児童一人一台のタブレットPC環境を整備した。まだ1年経っていないが、学びは確実に変わることは間違いないと実感している。
- ・タブレットPCなどのICT機器をはじめ、デジタル教材などまだまだ技術的にも内容的にも足りないところはたくさんあるが、1、2年の小手先のものではなく、国をあげて、しっかりと時間をかけてつくりあげていくものだと思う。

- ・清水座長の資料に、「同じ問題について、学級全体で話し合う」「一人が発表したことについて、学級全体で考える」とあったが、まさにこれは実現される。今まで、子どもが考えていることやノートは共有することはできなかったが、これが可視化される。これはメリットである。
- ・それだけでなく、「数名が一緒に学びあう」「数名が協力したり助け合ったりする」ことも行われる。個別学習でも、お互いに話し合ったり、教え合ったりする場面がでてくる。また、グループ活動では、子どもたちが1つの作品を作り上げている。ICTの環境で、本当に学びが変わってくる。こうしたことをもっと声を大にして言っていきたい。
- ・このようになると、教師も勉強が必要になってくる。これまでは知識を教えることに一生懸命で、教材研究もその考えに基づいていたが、このような変化の中で、子どもに何を学び取らせようか、というように学び方への働きかけも変わってきている。今回のICT環境では、子どもの成果を共有できるだけでなく、その思考(作成)の過程も共有でき、多様な考え方に教師が触れ、子どもと一緒に学び合う授業につながっている。
- ・まだまだ可能性はたくさんある。是非、総務省、文部科学省、国を挙げて、関心のない自治体を動かしていただきたい。興味のある教員はたくさんいるので、広く実現できる環境にしていきたい。

(安西座長)

- ・大変力強いメッセージを出していただき、うなずいている方が多く、大変心強い。これからの日本を担っていく子供たち、若い人たちのために、是非両省、委員の皆様、この会議体が貢献できればと思う。
- ・御意見が多々あるかと思うので、事務局に御遠慮なく出していただければと思う。今回いただいた御意見、また、これから出していただく御意見につきましても、事務局で整理し、次回以降の各省における具体的な議論につなげさせていただければと思っている。

(4)総務大臣政務官・文部科学大臣政務官挨拶

○城井文部科学大臣政務官より以下のとおり挨拶があった。

- ・我々は政府一体で頑張るべしと思っているが、もっと努力しなければならなかった次第である。
- ・いくつか宿題をいただいたと認識している。協働学習のゴールをはっきりさせること、アナログとデジタルの学びの違いをしっかりと検証することは、文部科学省の仕事であると思っている。また、一番関心が高いことだが、援助のない学校でこそ、こうした取組が生きるはずだと思うので、そこをしっかりと応援していきたい。
- ・先月、被災地である岩手県大槌町を訪問した。十分な教室が使えず、教材や実験器具も失い、劣悪な学習環境の中で電子黒板に向けられた子どもたちの真剣なまなざしを見て、情報通信技術の有効性を実感してきた。そうした有効性を是非捉えなおしながら、端末については総務省と相談し、デジタル教科書については、きちんと皆様にお届けできるように中身を磨いていく。絆プロジェクトについても、文部科学省として努力できる部分があるように思うので、それについては時間をいただきたい。
- ・また、教員やICT支援員に係る工夫、努力もまだまだ必要であることを本日よりよく認識した。そうしたところも含めて、総務省と一緒にしっかりと工夫をし

ていきたい。

○森田総務大臣政務官より以下のとおり挨拶があった。

- ・総務省と文部科学省が役割分担をして一体となった事業であり、省庁融合事業の象徴的な存在にこれからなっていくと感じている。議論も本当に盛り上がったので、財政当局にも話を聞いてもらいたいという心境である。
- ・ちょうど1年前に事業仕分けで全廃の判定を受けたが、あれから丸1年でここまでできたことは大変感慨深い。事業仕分けでは仕分け人側から省庁縦割りの主張もなされたが、それをばねにして省庁融合路線を進めていきたい。
- ・私も先日、実証校である葛飾区立の本田小学校を視察したが、これまでの御意見のとおり、集中力が明らかに高いのではないかと感じた。これは感性の問題であり、定量化することは難しいと思うが本当に集中している。
- ・先生方は、ICTの活用により、教材作りだけではなくて、子供たちがどこでつまづいているかなどについても非常にうまく把握していると思う。
- ・授業の進め方に大きなアドバンテージがでると思うので、こうした点を色々な人たちに共有してもらいたいと思う。児童・教師双方にいい影響が出ると思う。
- ・同時に、技術的には課題もあり、セキュリティ、利活用面、タブレットPCもまだまだ完成品ではないという話があり、そのとおりだと思う。
- ・ご提言いただいた生涯学習におけるクラウドのあり方についても、電子カルテと同様の技術的課題として、ストレージ、ネットワークストレスの軽減、個人情報等の管理等、個々に解決すべきことがある。そうした点も含め、議論を深化させていただきたい。
- ・いずれにしても、この事業に今後とも一生懸命取り組んでいくので、御指導を賜りたい。

○その他

(事務局)

- ・次回のフューチャースクール推進研究会は12月に開催を予定している。学びのイノベーション推進協議会は、来年1月に開催を予定している。研究会及び協議会における議論を踏まえ、次回の「ICTを活用した先導的な教育の実証研究に関する協議会」は、来年3月に開催をしたいと考えている。
- ・御意見につきましては、積極的に事務局の方にお寄せいただきたい。できれば11月中にいただければと考えている。御意見を元に、推進研究会、さらに推進協議会において、具体的な議論につなげていきたい。

(5)閉会

(以上)